



一般社団法人 奏林舎

調査団体名 : 一般社団法人 奏林舎
 設立年 : 2018年3月1日
 団体URL : <http://sourinsha.org/>
 活動拠点 : 愛知県岡崎市千万町町字寺沢52
 取材日 : 2018年12月11日
 団体代表者名 : 唐沢 晋平
 対応してくれた人の名前 : 唐沢 晋平
 調査員 : 手塚透吾、筒井信之、太田修
 レポート作成者 : 太田修

① 活動内容 奏林舎のサイトを参考にしました

- (1) 森林整備 (2) 森林管理 (3) 森林経営の支援 (4) 森林調査 (5) 素材生産、徳用林産物生産
 (6) 木製品、薪等の製造販売 (7) 森林環境教育、人材育成

認定等 : ・2018年4月 次世代林業事業体認定 ・2018年6月 合法木材供給事業者認定

※主に間伐: 良い材は製材所に収める。仕事は山林保有者から頼まれたり、こちらからそろそろどうですかとお願いする

② キャッチフレーズ

「森」を次の世代に献上する

(額田をにぎやかにし、豊かな森づくりを成し遂げたい、流域全体や次の世代に少しでもいい森をつなげたい)

③ 会のモットー(何を大切にしているか) 名前に込めた思い 奏林舎のサイトからコピペ

豊かな森づくりを通じて活気に満ちた地域にしていきたいという思いを、以下のように様々な意味を持つ「奏」の一字に込めています。

演奏する : 自然と調和した森づくりを通じて、山と地域に賑わいを取り戻す

前進させる : 森と地域の直面している課題に取り組み、具体的な解決を目指す

差し上げる : 山主と流域に暮らす地域住民、そして次の世代に豊かな森を届ける

④ 設立から現在に至るまで変化したこと

移住してから2018年2月末までの3年間は、市の嘱託職員と個人事業 : 「フォレスト・アート(初めの屋号)」

2018年3月1日「一般社団法人 奏林舎」設立

・雇用者2名(1ターンの30歳代と地元の50歳代)

・他に、農業や庭師の仕事を掛け持ちで、空いた時に手伝ってくれる人が2人

・一緒に働く人が増えたので、出来る仕事量が増えた

⑤ 連携している団体・専門家・自治体など

岡崎森林組合、しらい製材、小原木材(地域材:国産材の利用)、額田木の駅プロジェクト、額田林業クラブ、経済振興部林務課、岡崎市環境部森林企画係(2018年2月末までは環境部の嘱託職員だった。環境教育など)

⑥ 流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、地域資源の活用など)

岡崎のグループが実行員会をつくって「おかざき森の健康診断」中学から大学まで、学生と先生も参加してくれた

・専門は環境教育 岡崎市がやっている「ホテル学校」で教える

・地元の子供に頼まれて小学校の生徒に環境教育をしているー(街の市民と森の関係がものすごく開いている)

森林環境に関する出前講座やセミナーのほか、ネイチャーガイドや間伐体験、木工体験など、森と木にふれあい、楽しく学ぶ体験の機会を提供します。

経験豊富な自然体験活動指導者が企画・運営を行うため、安全で質の高いプログラムを実施します。

・イベントでのネイチャーガイド・薪わり体験

・間伐と間伐した木材を地元からも集めて保存し用途別に分けて販売「木の駅」:薪のビジネス

・特殊伐採:倒木の処理など(地元からの依頼)

・工務店の依頼で間伐体験を指導する

・森林の境界調査:山の境界がわからない・GPSなどで境界や面積を調査、地域に詳しい人のアドバイスを受ける。

※山の面積・境界調査 来年度、県の予算を活用して三十町歩ほど調査予定。

・林野庁の「新しい森林管理システム」がうまく機能することを期待している

⑦ 現在直面している課題

- ・事業で一番ネックなのは、人手不足。若い人に来てほしい。働いた分しか儲からない事業。田舎で遣り甲斐づくり。
- ・支払う給与をUPしたい、年収300万は目指したい。森林業がビジネスに結びついていない
- ※ 休みは多めで、副業もOK。田舎らしい暮らしのできる職場であることを維持したい

⑧ 今後やってみたいこと

- ・薪の事業(今はBtoC)→需要の拡大をしたい＝化石燃料から木材に転換するなど
- 湯谷温泉(愛知県新城市)のように岡崎でもどこかの施設に薪ボイラーを設置してもらえたら大きな需要が期待できる。
- ・地域に密着した林業、市への森林環境譲与税の使い方の提案 ・ある程度の設備投資と生産性向上
- ・障がい者や引きこもりの人、生きづらさを抱えている人の受け皿になりたい。
- ・また、退職した人の生涯活動の一つとしてもいいかもしれない ※額田に軸足をおいて、額田の活性化をしたい。車で30分圏内で活動する(地域密着型事業)。儲けが大きな目的ではない。

⑨ そのためにはどんな情報・人脈が必要か

- ・他業種の企業や団体とのつながり
- ・障がい者支援団体とのつながり
- ・林業に興味を持っている人
- ・「環境学習」の予算増→森林環境譲与税、平成31年度から譲与や、森林環境税(平成36年度)の使い道であるかも?

⑩-1. チームオリジナルの質問

<質問内容> 額田を選んだ動機は？

<答え>

自宅(生まれ)は幸田町だったが、母親が額田の教員で小さいころからよく額田にきて親しんでいた

→ 環境教育をするなら額田でやりたいと思うように。

木の駅アドバイザーの丹羽健司さんが額田の人と通じていたために、地域に入りやすかったのも一つ。

丹羽健司さんの勧め—— 額田は若手で山関係で動ける人がまだ少ないから額田で(豊田市と比べて)

⑩-2. チームオリジナルの質問

<質問内容> 林業を選んだ理由は？

<答え>

環境保全と地域活性化の一石二鳥の手段だから。

昔は田舎で林業が当たり前のように産業となっていた。その林業が深刻な問題を抱えていたため。

⑪ その他、伝えたいこと 次ページにつづく

○これまでの経歴

・個人事業(フォレストアート)(4年4ヶ月)兼(かねる)市の嘱託職員→春から奏林舎

○国民(市民)の意識や文化に影響を与えたい

- ・いくら森林管理のシステムを自治体で作ろうと、その土台となる地域の人々の意識が変わらなければ意味がない。
- ・お盆あけ9月～3月の木が水を吸い上げる前で「伐り旬(キリシュン)」、夏は農業、冬は林業、今は夏場も木を伐る。
- ・10・11・12・1月(9月～3月までが林業のシーズン) 夏場の材は虫が入りやすい。一月末までがハイシーズン(補助金、公共事業の関係など)
- ・今年の夏は暑くてヤッテおれなかった、異常に暑かった。

千万町(ぜまんちょうちょう)という集落はみんなクーラーなど無かったが、さすがに今年はクーラーつけた家がある

○仕事の取り方

- ・提案型 山主に山の管理方法の提案 → 委託される
- ・自治体からの委託 愛知県→森林組合→奏林舎「愛知県の森と緑づくり事業」
- ・特殊伐採 災害時(台風)の倒木の伐採＝危険を伴うから割といい値で可(林業というより造園業に近いが)
- ・国: 森林環境贈与税(仮称) 31年度から譲与で岡崎市に初年度3000万、将来1億が交付される予定と聞いている
当面は環境整備費に使われるといいかな??
- ・愛知県「森と緑づくり事業」は岡崎森林組合から仕事を請け負って間伐をしている。

①-2 その他伝えたいこと 前ページからの続き

木材は山の状況と木の種類によって品質が異なる、素材によって仕分けて活用

薪というのは、曲がり等の品質の低い間伐材を加工しており、普通はチップ材で(素の材を)そのまま出すが、薪用の材は倉庫を借りていて保存して雨の日に生産する。薪は1パレット1万円。

薪は針葉樹9割、広葉樹1割。広葉樹が好まれるが間伐材の針葉樹の水分含有量を20%以下に乾燥させて出荷するのでストーブの煙突などに支障がなく、利用者から喜ばれている。

写真



奏林舎のロゴ

2018年7月 乙川殿橋下で薪わり体験



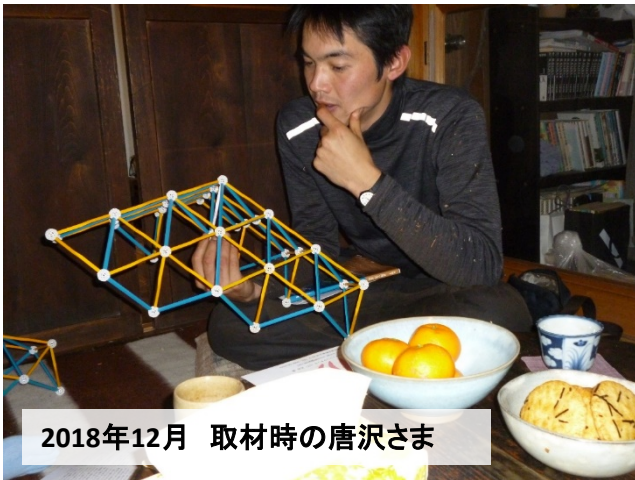
↑ : 2018年11月 あいち朝まで川談義 ↓



石窯パン屋さん・ダーシェンカ様へ薪の納入



2018年12月 取材時の唐沢さま



2018年12月 木下町の作業道開設&間伐





2016年01月13日 中日新聞 朝刊 18頁

山林守れ 児童が間伐

岡崎市額田地域の森林保護と地域振興を図る「額田木の駅プロジェクト」に十二日、地元の形埜（たがの）小学校の児童が初めて参加し、学校の裏山の森林調査と間伐を体験した。人の手入れが欠かせない山林保護の大切さを学ぼうと、体験学習に取り入れた。

（帯田祥尚）



樹齢35年のヒノキを切る児童たち＝岡崎市桜形町で

木の駅プロジェクトはスギやヒノキの間伐材を地域通貨と交換し、林業と地域経済の活性化を促す取り組みで、県内外で行われている。

面積の六割を山間部が占める岡崎市でも昨年二月、地元の林業者らが実行委員会を立ち上げ、五月に受け付けを始めた。

五年生十一人が山に入り、木の駅のメンバーや森林ボランティアらとヒノキの生育状況を調査。枝の間から見える空の範囲や落ち葉の量から普段の日照量と土の栄養分を推測し、間伐が必要な区画

岡崎・形埜小「木の駅」活動に初参加

を割り出した。さらに、高さ十以上ある樹齢三十五年のヒノキなどの幹に交代でのこぎりを当てて切り倒した。

倉橋知大君（二〇）は「一人じゃとてもできない作業」と間伐の大変さを実感。「立派な木が育つには、このように人の手が入ることが欠かせないんだ」と話した。

木の駅の事務局長を務める唐沢晋平さん（三三）は「山は人が二、三代かけて育てるもの。子どもたちに活動の意義を伝え、この中から将来の林業の担い手が出てくれれば」と期待を込めた。

二十七日には切った木の出荷作業を体験し、一ト当たり六千円相当の地域通貨「森の健康券」と交換する。「森の健康券」は地域の飲食店やガソリンスタンドなど五十店舗で使える。

「木の駅」1年で成果

森林の間伐材を出荷して、地域で使える通貨に交換する事業「木の駅プロジェクト」が、岡崎市の額田地区で成果を上げている。開始から一年余で、他では例を見ないほど大量の間伐材が出荷されたが、財源や人手不足など事業を続ける上での課題も浮かぶ。

(森田真奈子)

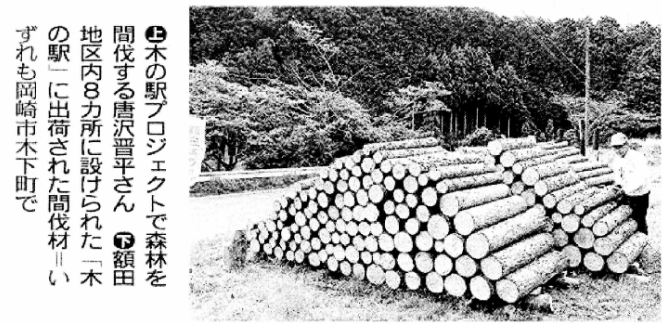
◆地域の底力 付の上限を千トに増やすや、林業に携わる地域の、額田木の駅プロジェクトが、一九六四（昭和三十）と、六月までで既に七百底力ではないか」と驚く。唐沢晋平さん（三）は「一ト以上の木材の輸入自由が下落してから、山主は間伐作業のコストを回収しにくくなった。間伐されないため森林の中まで太陽光が差し込まず、山が荒れてしまう問題は古くて新しい。

◆境界分かれず 六千円は出荷を続ける上で最低限必要な額」と考へる。若手の山主は長年山に入りなかつたことから、取り組む「額田林業クラブ」があるなど林業家の立地できる間伐材の売り方、どこまでが自分の土地なのか境界が分からず、間伐できない事態も起きて

は、市場では高値で売れず山に捨てられていた木材を、出荷量に従ってプロジェクトの実行委員会が買い取る仕組み。額田地区では一トにつき、地元の商店などで使える地域通貨を六千円分受け取れる。原資の半分は間伐材をチップ材用として売った収入、残りは市の補助金で賄う。

同様のプロジェクトは全国約七十カ所で行われている。初年度の出荷量は百トに満たない所が多いが、二〇一五年度に始めた額田地区は八百四十トを出荷。一六年度は補助金交

は「森林への強い思い、山主にとって大きな負担のは七十代以上の人は「森林再生機構（岐阜市）の丹羽健司さん（六）は「森林への強い思い、山主にとって大きな負担のは七十代以上の人は



①木の駅プロジェクトで森林を間伐する唐沢晋平さん ②額田地区内8カ所に設けられた「木の駅」に出荷された間伐材。いずれも岡崎市木下町で

岡崎・額田地区 事業継続へ財源模索も



ち。唐沢さんは「境界線の伝承を急がなければ」と話す。

◆課題解決で自立 一年にプロジェクトを始めた額田市山間部の旭地区では当初、補助金もなく、住民自らが財源を確保する方法を考え

とて売ったり、全国から大勢の視察団を受け入れたらして収入を増やした。間伐材の出荷量や地域通貨の流通量は年々増え、山の様子は目に見えて変わった。旭木の駅プロジェクトの戸田友介さん

「木の駅」は農家が道の駅に野菜を出荷するようになり、木材も気軽に出荷してほしいとの願いが込められた。

現場から

ん（三）は「自分たちで地域を変えた体験は自信になっている」と語る。額田地区でもプロジェクト開始をきっかけに、市街地に住む人たちに有償で間伐作業をしてもらったり、木くずを燃やした際の熱を利用するバイオマス発電を検討したりするなど、外部との関わりが生まれてきた。

丹羽さんは「補助金頼みだった地域も、プロジェクトを続ける中で自立の道を探った例は多い。額田地区も課題に直面した時こそ変化が起きるはず」と期待している。

(この記事は、中日新聞社の許諾を得て転載しています)